

とびやまじょう
「飛山城と宇都宮城」

芳賀氏の城、飛山城

宇都宮市中心部から水戸方面に向けて車を走らせると、やがて鬼怒川をわたります。橋の上から左手を見ると、鬼怒川東岸の崖の上にひときわ高い飛山城跡を望むことができます。現在ここは、国指定史跡として保存され、平成17年3月に史跡公園の開園を目指して整備がすすめられています。

飛山城は、宇都宮城の城主であった宇都宮氏の家臣、^{はが}芳賀氏が築いたお城です。しかし、飛山城は、決して単なる宇都宮城の支城であったわけではありません。

芳賀氏は、宇都宮氏の家臣と言われながらも、宇都宮氏に対して相当に独自の立場をもっていました。それと同様に、飛山城も宇都宮城とは密接な関係をもちながらも、ときには宇都宮城を攻撃する基地として使用されることがあるなど、さまざまな動きのなかで機能していたと考えられます。

そこで、宇都宮城と飛山城の長くて深い関わりをたどってみることにしましょう。(つづく)

飛山城史跡公園



「^{とびやまじょう}飛山城 と宇都宮城」

飛山城の築城

飛山城は、^{かまくら}鎌倉時代の後半に、宇都宮氏の重臣で、現在の^{もおか}真岡市付近に本拠を置いていた^{は が たかとし}芳賀高俊により築られました。

飛山城がある場所は、^{かわち}芳賀郡と^{ふなうん}河内郡との境界であり、^{ぶなうん}鬼怒川の舟運などの交通路をおさえる^{ようしょう}要衝の地です。また、芳賀氏は飛山城に拠点を移すことによって、宇都宮氏との関係を一層強めようとしたと考えられます。

その頃の宇都宮氏は、^{やすつな}宇都宮泰綱・^{かげつな}景綱が^{ばくふ}鎌倉幕府の^{ひょうじょうしゅう}評定衆（幕府の政治を審議する役職）になり、^{こうあんしきじょう}景綱が「^{こうあんしきじょう}宇都宮弘安式条」（宇都宮氏が自分の領地を治めるために定めた法律）を制定するなど、繁栄の時期をむかえていました。

芳賀氏は、飛山城を足がかりに、そのように勢力が強くなった宇都宮氏と接近し、自分の権力を強化しようとしたのでしょ。

その後、^{たかなお}芳賀高俊の子・高直が^{たかひさ}宇都宮景綱の子・高久を養子にむかえることで、芳賀氏は宇都宮氏の一族となり、強い権力を手にいれたことにも、飛山城の存在が大きく関わっていたと考えられます。（つづく）

「^{とびやまじょう}飛山城と宇都宮城」

宇都宮公綱と南北朝

^{ごだいごてんのう}後醍醐天皇が^{かまくらばくふ}鎌倉幕府の打倒をめざして戦い始めていた^{しょうけい}正慶2(1333)年、宇都宮城主・^{きんつな}宇都宮公綱は、鎌倉幕府の命令で近畿地方に出陣し、^{くすのきまさしげ}後醍醐天皇方の名将・楠木正成と戦います。このとき正成は「宇都宮氏は関東で一番の勇者だ。^{きせい}紀清の^{りょうとう}両党(^{ましこ}益子氏と^{はが}芳賀氏)は戦場で命を捨てることなど何とも思っていない。」とあって恐れたということです。

鎌倉幕府が滅びると、^{あしかが}後醍醐天皇の政治が始まりますが、^{たかうじ}足利尊氏が天皇と対立し、日本全国が^{なんちょう}後醍醐天皇の南朝に味方する勢力と、^{ほくちょう}足利尊氏を中心とする北朝を支持する勢力に分かれて戦う^{なんぼくちょうじだい}南北朝時代となります。

この時期、公綱は南朝に味方して各地を転戦します。この間、^{たかな}芳賀氏の当主・芳賀高名は、飛山城を拠点に宇都宮氏の実権掌握を狙っていました。^{けんむ}建武4(1337)年、ついに高名は公綱の子・^{うじつな}氏綱を擁して宇都宮城を占拠し、北朝に味方する態度を明確にしました。

こうして、南朝方の宇都宮公綱対北朝方の芳賀高名・宇都宮氏綱という対立が決定的となり、^{しもつけのくに}下野国(栃木県)以外の勢力の動きともからんで、宇都宮城と飛山城も大きな戦いの渦に巻き込まれていきます。(つづく)

とびやまじょう
「飛山城と宇都宮城」

飛山城落城

形勢不利となった後醍醐天皇の南朝は、東日本を勢力下におくため、北畠親房を派遣しました。親房は船で常陸国（茨城県）に上陸し、小田城（つくば市）に根拠地をおきました。その配下の武将・春日顕国は積極的に下野国（栃木県）への攻撃を開始します。

顕国は、延元4・暦応2（1339）年に八木岡城（真岡市）と益子城（益子町）を攻め落とし、上三川城（上三川町）と箕輪城（国分寺町）の北朝方の軍勢を追い払いました。

勢いに乗る南朝方は、高館山（益子町）の西明寺城を下野国における基地とし、北朝方に味方する宇都宮氏綱・芳賀高名の重要拠点・飛山城に迫ります。

興国元・暦応3年（1340）年には、飛山城の管理下にあった石下城（市貝町）が落城し、守備の兵士は全員戦死しました。

北朝方の支援も及ばず、翌興国2・暦応4（1341）年8月1日、春日顕国の攻撃によって、ついに飛山城は落城します。そのときの様子は記録に残っていませんが、石下城の例から見ても、非常に激しい戦いがあったものと思われます。

こうして、宇都宮城と飛山城は、それぞれ北朝方と南朝方の最前線となって向かい合うことになったのです。（つづく）



「^{とびやまじょう}飛山城と宇都宮城」

飛山城奪還

重要拠点である飛山城の落城は宇都宮氏綱・^{うじつな は が たか な}芳賀高名らに大きな衝撃を与えました。当時の記録には宇都宮城にいる武士たちがすっかり意気消沈した様子が記されています。

飛山城の落城に先立ち、^{ほくちょう こうのもるふゆ}北朝方は高師冬を宇都宮城に派遣し、^{なんちょう}南朝方の^{かすがあきくに}春日顕国の猛攻にさらされている飛山城の支援を図りました。

しかし、落城が避けられないとみた師冬は、^{きたばたけちかふさ}北畠親房が関東における南朝方の根拠地としている^{おだ}小田城（茨城県つくば市）を背後から攻撃するため、^{うりづら なか}瓜連城（茨城県那珂市）に移動。そこから南下して小田城に攻めかかりました。

師冬の攻撃を防ぎきれなくなった南朝方は、^{せき ちくせい}関城（茨城県筑西市）と^{だいほう しもつま}大宝城（茨城県下妻市）に移動して抗戦を続けます。しかし、南朝方不利の情勢のなかで、関東地方の武士たちは大半が北朝に味方し、両城は孤立していきます。

^{こうこく こうえい}興国4・康永2（1343）年、関城と大宝城はあいついで陥落し、関東における南朝方の組織的な活動は終わりました。北畠親房は南朝の本拠地・^{よしの}吉野（奈良県）に戻り、春日顕国は捕らえられて殺されました。

こうした情勢のなかで、宇都宮城を拠点とした芳賀高名は鬼怒川を越えて攻勢を強め、飛山城を奪い返しました。その日付ははっきりとはわかりませんが、関城・大宝城陥落以前だと考えられます。(つづく)



「^{とびやまじょう}飛山城と宇都宮城」

北朝の勝利

関東地方での^{なんぼくちょう}南北朝の戦いは、^{ほくちょう}北朝方の勝利に終わりました。

^{なんちょう}南朝の関東地方への進出は、^{くすのきまさしげ}楠木正成や^{にったよしさだ}新田義貞などの有力な武将が戦死した後の劣勢を挽回する大勝負だったのです。それは、関東・東北地方などの東日本を支配下において北朝に対抗するという雄大な構想でしたが、その企ては失敗しました。

関東地方での戦いで、南朝方の支配領域が最大であったのが、飛山城を攻め落とし、宇都宮城と^{たいじ}対峙した^{こうこく}興国2・^{りやくおう}暦応4(1341)年の時点でした。そのまま南朝方が勢力を拡大していれば、^{しもつけのくに}下野国(栃木県)を制圧し、北上して東北地方へ進出する予定だったと思われます。

この後も全国で戦いは続きますが、北朝の優勢は動かないものとなり、その中心人物である^{あしかがたかうじ}足利尊氏がつくった^{むらまちばくふ}室町幕府が、政権として確立していきます。

一方で、北朝に味方した宇都宮氏綱は^{うじつな}上野国(群馬県)と^{こうずけのくに}越後国(新潟県)の^{しゅご}守護(一国の武士を統率し、行政や軍事をつかさどる役職)に、^{はがたかな}芳賀高名(禅可)がその^{しゅごだい}守護代(守護の代理として実際に現地を支配する役職)に任命されるなど、宇都宮氏と芳賀氏が大きく勢力を伸ばしました。

南北朝の争乱のなかで、飛山城と宇都宮城が歴史の行方を左右する重要な役割を担った時期だったといえるでしょう。(つづく)

「^{とびやま}飛山城と宇都宮城」

宇都宮氏と芳賀氏の対立

^{なんぼくちょう}南北朝時代以降，しばらくの間，飛山城は大きな戦いや事件の舞台にはなりません。しかし，^{はが}芳賀氏の拠点として，また，^{かわち}河内郡と芳賀郡の境界に位置する要衝として，重要な役割を持っていたことは間違いありません。

飛山城が再び歴史の表舞台に登場するのは，^{せんごく}戦国時代のことです。

16世紀になると，宇都宮氏と芳賀氏の間には複雑な対立関係が生じ，^{てんぶん}天文10（1541）年，宇都宮城主・宇都宮^{としつな}俊綱は，真岡城主・芳賀^{たかつね}高経を殺害しました。高経の子・高照は^{たかてる しらかわ}白川（福島県白河市）に逃亡し，^{ましこ}益子氏出身の^{たかさだ}芳賀高定が宇都宮俊綱の支持のもとに芳賀氏の当主となりました。

天文18（1549）年，白川にいた^{な す たかすけ}芳賀高照は那須高資の支援のもとに宇都宮氏を攻撃，宇都宮俊綱は，^{そおとめざか}激戦の末，五月女坂（さくら市）で那須氏の家来・^{あゆがせやごろう}鮎ヶ瀬弥五郎の矢にあたり戦死します。

高照はたちまち宇都宮城を占領，宇都宮俊綱の子・^{ひろつな}広綱は芳賀高定を頼って^{もおか}真岡城（真岡市）に逃亡しました。

ここに，真岡城の宇都宮広綱・芳賀高定と，那須高資の支援を得た宇都宮城の^{たかてる}高照が対立する状況となり，飛山城がその最前線としての役割を担うこととなります。（つづく）

「^{とびやまじょう}飛山城と宇都宮城」

戦国時代の下野国

このころの^{しもつけのくに}下野国（栃木県）をめぐる情勢は複雑です。

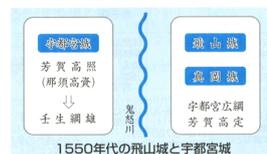
有力な^{せんごくだいみょう}戦国大名がいなかった下野国は、^{さがみのくに}相模国^{おだわら}小田原（^{かながわ}神奈川県^{おだわら}小田原市）の^{ほうじょううじやす}北条氏康、^{えちごのくに}越後国^{かすがやま}春日山（^{にいがた}新潟県^{じょうえつ}上越市）の^{うえずぎけんしん}上杉謙信、^{ひたちのくに}常陸国^{おあた}太田（^{いばらき}茨城県^{おあた}常陸太田市）の^{さたけよしあき}佐竹義昭、^{かいのくに}甲斐国^{こうふ}甲府（^{やまなし}山梨県^{たけだ}甲府市）の^{しんげん}武田信玄などの巨大勢力のはざまになっていました。

^{は が たかてる}芳賀高照を支援して^{ひろつな}宇都宮^{もあか}広綱を^{な す たかすけ}真岡（^{な す たかすけ}真岡市）に追いやった^{な す たかすけ}那須高資は、^{ひろつな}広綱を支援する^{たかさだ}真岡城主・^{たかさだ}芳賀高定の計略によって、^{せんぼん}千本城（^{もてぎ}茂木町）で殺害されました。宇都宮城の^{は が たかてる}芳賀高照は^{な す たかすけ}那須氏のうしろだてを失って孤立します。

その状況を見ていた^{みぶつなたけ}壬生綱雄は、^{うじやす}北条氏康の支援のもとに、^{は が たかてる}芳賀高照を追って宇都宮城を占拠しました。行き場所を失った^{は が たかてる}高照は、それまで対立関係にあった^{こうじ}真岡の^{たかさだ}芳賀高定を頼りますが、^{こうじ}弘治元（1555）年^{たかさだ}高定によって^{たかさだ}真岡で殺害されました。

こうして宇都宮城の^{あるじ}主が入れ替わり、^{うじやす}北条氏の支援を得た宇都宮城の^{みぶつなたけ}壬生氏と、^{たかさだ}真岡城にいる^{ひろつな}宇都宮広綱・^{たかさだ}芳賀高定の対立となりましたが、^{とびやまじょう}飛山城は相変わらず^{たかさだ}真岡方の最前線となっていました。

（つづく）



「^{とびやまじょう}飛山城と宇都宮城」

強大な戦国大名の下野侵入

弘治3(1557)年、宇都宮^{ひろつな}広綱と芳賀^{はがたかさだ}高定は壬生^{みぶつなたけ}綱雄に対抗するため、
^{ひたちのくに}常陸国^{おた}太田(茨城^{いばらき}県^{ひたち}常陸^{おた}太田市)の佐竹^{さたけ}義昭^{よしあき}に支援を求めました。

同年12月、佐竹義昭は五千人の軍勢を率いて飛山城に入城。宇都宮城の壬生綱雄に対して強い圧力を加えました。これは、宇都宮氏と壬生氏の争いというだけでなく、そのうしろだてとなっていた佐竹義昭と相模^{さがみの}国^{くにおだわら}小田原(神奈川^{かながわ}県^{ほうじょう}小田原^{じやす}市)の北条氏^{せんごく}康^{だいみょう}という、強大な戦国大名の抗争とも言えるものでした。飛山城と宇都宮城が、佐竹氏と北条氏の最前線となっていたのです。南北朝時代以来、飛山城は最大の軍事的な緊張状態に置かれたこととなります。しかし、壬生綱雄は全面对決を避けて鹿沼^{かぬま}城(鹿沼市)に退去し、宇都宮広綱が宇都宮城に入りました。こうしてほぼ10年ぶりに宇都宮城が宇都宮氏の本拠地として復活することになったのです。以後広綱が宇都宮城主となり、高定が広綱を補佐する体制ができあがりました。

翌永禄元(1558)年、越後^{えちご}国^{にかすが}春日山(新潟^{にいがた}県^{じょうえつ}上越市)に本拠をおく戦国大名・上杉^{うえすぎ}謙信^{けんしん}は、北条氏^{ほうじょう}康^{じやす}に対抗するため関東地方に侵攻。5月には、下野国(栃木^{おやま}県)に来襲し、小山(小山市)の小山^{たかとも}高朝を降伏させたのち、宇都宮領の多功^{たこう}城(上三川^{かみのかわ}町)に攻め寄せました。

宇都宮城の宇都宮広綱と真岡^{もおか}城(真岡市)の芳賀高定は多功城の救援に駆けつけ、激戦の末かろうじて上杉勢を退けました。(つづく)

「^{とびやまじょう}飛山城と宇都宮城」

飛山城のおわり

宇都宮城とのかかわりの中で、重要な役割を果たしてきた飛山城ですが、^{せんごく}戦国時代の終わりごろ、宇都宮氏が^{ほうじょう}北条氏に対抗するため^{たげ}多気城(宇都宮市^{たげ}田下町ほか)を築き、本拠地を宇都宮城から多気城へ移すと、その地位が低下しました。

それは、^{はが}芳賀氏の本拠地の^{もおか}真岡(真岡市)と宇都宮氏の本拠地を中継するという機能が、宇都宮氏の本拠地が遠くなったため、果たしにくくなったからだと考えられます。

^{てんしょう}天正18(1590)年、^{とよとみひでよし}豊臣秀吉が北条氏を滅ぼした後に、「^{はきやく}不要な城は破却せよ」という命令を出しました。その際、役割の低下していた飛山城は廃止の対象となったと考えられます。(つづく)

^{とびやまじょう}
「飛山城と宇都宮城」

400年の眠りから覚めた飛山城

飛山城の発掘調査の際に、わざわざ土塁^{どるい}を崩して堀を埋めた痕跡が発見されました。これが、「破却^{はきやく}」の際に行われた城を放棄するための行為の跡だと考えられます。

それ以後、飛山城は城として復活することなく、長い眠りについていました。

現在、400年の眠りから覚めて、史跡公園として整備された飛山城に立てば、晴れた日には宇都宮の市街地や日光連山を一望することができます。

鎌倉時代から戦国時代までの300年間、ここに立った数多くの武将たちは、その景色をどのような思いで見いていたのでしょうか。(つづく)